

# 日米高校生「原発」討論

東日本大震災後のエネルギーや原子力発電所はどうあるべきか——。日米の高校生が「3・11後のエネルギー政策・原発を話し合う」をテーマに討論する交流授業が江別高校（江別市）であった。生徒らは脱原発派と推進派に分かれ、安全性や生活への影響にも触れながら、高校生の視点でエネルギーのあり方について考えた。

## 江別高で交流授業



米国の高校生の意見に耳を傾ける生徒ら—江別市上江別の江別高校

討論が行われたのは6月26日。江別高校では政治経済の授業の中で原発やエネルギーについて学習を続けており、この日は市内の国際交流団体の招きで来日した米国・ニューヨーク州の私立リバーデル高校の生徒13人が交流授業として参加することになった。担当の池田考司教諭(49)が事前に調べた江別高の3年生39人の意見は、「段階的原発廃止・脱原発派」が20人、「原子力発電所の維持、推進派」が19人と、ほぼ半々に分かれた。

最初に意見を発表したのは江別高生。推進派は、他の発電方法でも事故やミスが起きる可能性を挙げながら「原発の安全性を高める方法を探す対策が必要」と指摘。これに対し「脱原発派」は「また同じような被害が出たら取り返しがつかない」「節電の意識が高ま

り、新エネルギーにも注目が集まっている。この風潮をうまく利用して脱原発へ向かえばいい」と訴えた。

米国の高校生も意見が割れた。原発推進派からは「今原発をなくしたら電気が不足する。十分な電気をつくれるようになってから安全なものを考えればいい」。一方で、脱原発派は「太陽や地熱など、より安全なエネルギーで電気を作ることができる」と論じた。

通訳を挟んだ討論は約1時間続いた。参加した小館佑太さん(17)は「計画停電で冷蔵庫が使えなくなると困るけれど、我慢できる。足りない分は自然エネルギーで補えばいい」と原発には反対の姿勢だ。坂本美有さん(17)は「計画停電は困るので、原発は今までどおりあった方がいい」との考えだが「どんな津波でも絶対大丈夫という保証があるなら」と条件を付けた。

同校では8月上旬、被災地の学校と交流するため、一部の生徒が宮城県石巻市の高校を訪ねる予定だ。池田教諭は「生徒たちは非常によく考えている。もっと子どもたちの意見を聞くべきだと思う」と話した。

## 「まず電力確保」「自然エネ活用」日米とも意見割れる